令和4年2月26日　北海道新聞　朝刊
17面　地域の話題　本学関連記事

樽商大目指し静かな闘志

前期２次試験に644人

2022年度国公立大学入試前期日程の2次試験が始まった25日、小樽商科大の入試に受験生644人（志願者718人）が挑んだ。小樽市内は比較的穏やかな天気で交通機関の大きな乱れはなく試験のトラブルなどもなかった。

同大によると、志願倍率は昼間コース（定員280人）で前年度比0・2ポイント減の2・2倍。夜間主コース（同20人）は同2・4ポイント減の4・6倍だった。

今年もコロナ前に見られた受験生を激励する先生や保護者などの姿がなく、受験生は静かに試験会場に入り、試験に臨んだ。新型コロナウイルス対策のため、会場では収容人数の半数以下で試験を行った。

午後5時半には試験が終了し、受験生は保護者の車やタクシーに乗って家路についた。札幌西高3年の下川原百音（もね）さん（18）は「英語の難易度が高かった。合格したら商学を学びたい」と話した。

試験は同大と仙台市内の会場（志願者20人、受験者18人）で実施。合格発表は3月6日午前10時からホームページで行う予定。

（日野夏美）

小樽商科大の試験を前に問題用紙を受け取る受験生

令和4年2月26日　北海道新聞　朝刊
33面　本学関連記事

大雪・コロナ乗り越え春へ

国公立大2次 道内1万人挑む

国公立大入試の2次試験が25日始まり、道内は前期日程の11大学に約1万人が臨んだ。大雪による目立った混乱はなかったが、受験生は新型コロナウイルスの感染対策に加え、1月の大学入学共通テストで起きた試験問題の流出により不正対策が強化され、緊張を強いられる中での本番となった。

（高木乃梨子、光嶋るい、日野夏美）

道内は大雪の影響で25日もJRの運休が相次いだが、各大学とも日程変更などはなかった。

札幌や東京など5会場を設けた室蘭工業大では、受験生1人が特急の運休を理由に受験会場を同大から札幌に変更した。同大で受けた函館中部高3年の中野凪（なぎと）さん(18)もJRが運休し、母親の車の運転で24日に室蘭入りした。「不安はあったが無事に受験できほっとした。自分の力を出し切れた」と笑顔で話した。

道内最多の5409人が出願した北大では、会場につながる歩道が大雪で狭まり、1人通るのがやっとの状態。札幌市白石区の予備校生高倉柊（しゅう）さん(19)は「地下鉄の駅から会場まで30分もかかった」と困惑した。

共通テストでは世界史の問題が動画撮影され、外部に流出する事件が発生。2次試験は消毒や換気の感染対策のほか、不正対策が強化された。北大は試験官が教室内の巡回を増やし、不審な動きがないかの確認を徹底した。神戸市から受験した高校3年の原七海（ななみ）さん(18)は「(試験官から)『不用意に周りを見渡さないように』と注意があった。教室内の見回りは気にしないよう、必死に問題を解いた」と振り返った。

北大での2次試験を終え、会場を後にする受験生たち
＝25日午後6時15分、札幌市北区（国政崇撮影）

全国初となる国立3大学の経営統合を4月に控える小樽商科大、北見工業大、帯広畜産大は、統合初年度の入学生を迎えることになる。金融分野を学ぶため、樽商大を受験した千歳高3年の油坐大空（そら）さん(18)は「経営統合で幅広い分野を学べそう。職業の選択肢が広がるので、将来的に役立つかも」と期待を寄せた。

2次試験は3月8日以降に公立大の中期日程、同12日以降に後期日程がある。北大などはコロナ感染などで欠席した受験生への追試験を予定している。合格発表は同5日から行われる。

令和4年2月28日　北海道新聞　朝刊
13面　地域の話題
本学教員カロラス・プラート先生　掲載

Cool! 小樽

ゼミ生、まち活性化に協力

カロラス・プラート

小樽商科大にはセミナー（ゼミ）と呼ばれる伝統的なクラスがあります。教師の指導の下、小グループに分かれた学生たちが主体的に研究を行い、成果を発表して議論する。大規模教室で行う一方通行の講義とは正反対の指導方法で、アクティブラーニング（能動学習）とも呼ばれます。

歴史は古く、明治期にさかのぼります。1897年（明治30年）に創設された京都帝国大学がドイツの教育システムに倣って導入しました。

私のゼミは二つの課題を研究しています。海外在住の外国人客に対する国際マーケティングと、実際に訪れた外国人観光客に対するマーケティング（調査など）です。グローバルとローカルの両基準で考え行動する「グローカル」な人材を育成する小樽商大の使命にも、合致しています。

まず理論と事例を研究し、次に調査や実地見学で「現場で起こっていること」を知り、最後に研究で得た知識の実践を試みます。新型コロナ禍で外国人客の入国が閉ざされているため、現在は国内市場と国内客に重点を移しています。

昨年末、ゼミ生の1人が「北運河」地区の活性化プロジェクトを提案しました。クールなバーやレストラン、ライブハウス、小樽市総合博物館などがありながら、札幌圏の若者にあまり知られていない。学生たちはこの地区の経営者らと協力し、若者が興味を持つアイデアを持ち寄りました。

インスタグラムのアカウント（otaru_kitaunga）を開設し、歴史的建造物や景観スポット、レストランなどの写真や短いビデオを発信。北運河の写真を投稿してくれた人に協力店のクーポンを提供する写真コンテストも準備しています。コロナ禍でプロジェクトの一部は中断していますが、彼らの挑戦は今後も続きます。

（小樽商科大教授＝オランダ出身）

◇翻訳・北海道新聞HotMedia、構成・北海道新聞小樽報道部。原文は多言語サイト（https://h2w.hokkaido-np.co.jp）＝QRコード＝で読めます。